

敦賀空襲から80年

昭和20年当時3万人以上が暮らしていた敦賀市は、空襲で家屋の7割を消失。焼け野原と化し、敦賀駅から敦賀港まで一望できたという。

古くから大陸や畿内を結ぶ港として知られてきた敦賀港。北陸自動車道は全線開通から30年を迎え、近畿・東海・北陸をつなぐ敦賀JCT。昨春には待望の北陸新幹線金沢―敦賀間が開業、発着駅としてにぎわいを見せる敦賀駅。

日本海の“ヘソ”敦賀は、港湾都市として未来に向かって発展途上にある。



敦賀連隊史蹟碑
(敦賀市・桜ヶ丘住宅団地)

B 29 が敦賀を襲う
昭和19年、敦賀市の歩兵第119連隊にある命令が下った。任務は「退却支援」。ビルマ戦線で壊滅状態にあった主力部隊を救出せよというものだった。
味方の盾となり、連合軍の追撃を防ぐ第119連隊。補給もなく、マラリアや赤痢など病に倒れる兵士も続出した。第119連隊はおよそ2700人が戦死。生存者は1000人にも満たなかった。

歩兵第119連隊は、大日本帝国陸軍の連隊のひとつ。大日本帝国陸軍は明治4年から昭和20年まで日本に存在していた軍隊組織である。
昭和20年7月12日深夜の敦賀空襲は、日本海側の都市として最初のものであった。敦賀市（人口3万1000人）は、爆撃目標とされた都市のなかで最も規模の小さい市だったが、米軍の「作戦任務報告書」では、朝鮮との3大定期連絡港の1つであり、関門海峡の機雷封鎖によって日本海航路の重要性が高まっているとして「重要な目標」にされていた。
当日の敦賀市の天候は戻り梅雨で、上空は厚い雲におおわれ、市街地東部の川東地区がまず火の海となり、児屋川と旧笹ノ川にはさまれた川中地区にひろがっていた。2時間ほどの爆撃で、市内の全戸数の約7割にあたる4119戸が焼失し、1万9000人



昭和20年7月12日敦賀空襲で焼け野原と化する敦賀市

の市民が家を失った。
その後敦賀市には、小規模だが30日、8月8日と2度の空襲にあった。特に8日のものは、9100以上の高空から昼間に目視で「化学工場」（実際には東洋紡績敦賀工場）を標的として投下した原子爆弾の模擬弾であったことが、のちに明らかになった。
県内でも市街地を中心に頻繁に防空・灯火管制の訓練が行われていたが、大規模な都